

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

59年11月現在 会員数
逗子地区 170名
葉山地区 298名
大船地区 65名
(合計) (533名)

59年12月号 (149号)
発行 者
根岸 岳 萃
編 集
中 村 愛 岳

歳月のながれ

逗子A支部 安田 寿風

今は亡き竹村梅岳先生に言葉をかけられたのがきっかけで、根岸先生の御指導を受けることになり、皆様がすばらしい声で吟じていただけるのを聞くと、私ごとまでついて行けるのかと案じながらも、毎週のお稽古を楽しみに教場へ通い始めて、もう十一年の歳月がながれ、又今年も暮れようとしています。

幸いに健康に恵まれ、毎年色々の行事のある毎に参加し、全国大会にはかゝらず同行させていたゞいております。そして帰路につく時は必ず「又来年もお逢いしましゅうね」と言葉をかけあってお別れします。良き指導者と良き友にめぐり会えた事を本当に嬉しく思っております。まだまだ未熟で学ばなければなりません。皆様どうぞ今後共よろしくお導き下さいますようお願い申しあげます。

子育ての 歳月ながれ残り世を

吟学びつゝ、年を忘るゝ

吟と舞 心の若さ保ちつゝ

けわしき道を越えてゆくなり

60年・一月の行事予定

碩心会・初吟会

とき 60年1月20日(日) 10時～16時
ところ 逗子京急ビーチセンター
会費 二千九百円
申込切 12月20日(各支部毎に)
余興申込 所定用紙に多数申込歓迎
その他 参加者はネームプレート着用
変更は1月15日迄千葉方へ

県本部・皆伝以上審査課題講座

とき 60年1月13日(日)
ところ 平塚農業会館

県本部・初吟・初理事会

とき 60年1月27日(日)
ところ 横須賀孔雀苑

59年度・碩心会

大船地区吟道温習会

大船地区長 下俣 亮岳
去る十一月十一日(日)、碩心会の昭和五十九年度大船地区吟道温習会が、横浜市戸塚区、中小企業労働研修センターの四階大

会場に於て、二百四十余名の会員が参集して盛会に行われました。この日、明け方は雲の多い空模様で、雨天かと危ぶまれたところ、徐々に薄日のもれる穏やかな日和に恵まれた。

定刻の九時三十分に開会の挨拶、ついで松井岳洋先生作詩の、碩心会の詩の力強い大合吟があつて、第一部大船地区会員の朗詠に入った。次々の出吟によつて午前の行事は順調に進行した。しかし、午後の行事が予定内におさまるか、一抹の不安を感じ、昼食時間を十分ほど繰りあげて許証式にうつることになった。

碩心会会長根岸岳萃先生から、多くの昇段、昇位の皆様に、それぞれ許証を親しく手渡され、大変嬉ばしく感じた。審査の時と違い、許証された皆様は、晴れやかな一面にも、努力の成果をかみしめているようにもうかがえた。

さて、当日の出吟者は、日頃の練習を余すところなく、立派な出来栄と、私なりに思いました。場内も静肅のうちに、よどみない進行の流れが印象にのこつた。温習会が和やかなうちに幕を閉じたことは、偏に諸先生の御指導と、皆様の御協力の賜として、この紙上で御礼申しあげ、私の記事を終わらせていただきます。

名古屋博・見聞記

銀詠支部 清田 嬢風

菊薫る 地上に眩し金のシャチ

十一月二十一日、前日迄の風雨がうそのような秋晴れに恵まれて、白く眩しい富士のお山に歓声をあげ、一路金シャチめざしてマイクロボスは名古屋博に向いました。今回は主催側の銀詠支部内で出発間際に参加急増のため、橋本支部長さんが「兄弟会」なる杉山雪岳さんに応援を求めたところ、葉山地区の吟友五名の方々の御参加をいただき出発することができました。

長い道中でしたが、福引等で車内を楽しんでいるうち、車は東名高速を下り名古屋市内に入りました。さすが六大都市の一つとあらためて、活況ある商・工業の発展のすばらしさに息をのみました。車を降りて中心部の程近くのタワービルの展望台に上る。こゝよりの眺望はすばらしく、一点の雲もない晴天に、近くのビルの窓ガラスに反射する光が眩しく、金シャチのなのお城を眼下にみてから、金シャチの会場へと急ぎました。

名古屋博は噂通り、駐車場も城内も、平日というのに満員盛況でした。お目当の

金シャチ館は「立ち止らないで下さい」の声も何のその、館内に一歩足を踏み入れた瞬間、金色に輝く金シャチに一瞬息をのみ、足を止めてしまいました。押されるように歩きながら見上げる金シャチに照明が当てられ、照明の色が変る度に金シャチの色が違う色に輝く様は何とも見事でした。

私達は天守閣まで上り、再び市内を一望し、あらためて晴天に感謝しました。城外は名古屋博祭りて種々の催しものがあり大変賑わっておりました。菊花展、ロボット館、城下町並等、時間の関係上、そのごく一部でしたが、念願の金シャチが見学出来満足でした。

広い城内と混雑に迷老が出て、帰りの出発時間が遅れるという一幕もありましたが、帰りの車内は民謡あり、カラオケ演歌あり、又ソフトムーアのナツメロ等たつぷり聞かせていただき、ほんとうに楽しい一日でした。支部は別でも共に吟道を歩む碩心会の吟友同志：十年來の知己のごとく、なんとなく同じ教場の人の様に振舞えましたのは、特別参加下さいました皆様方のおかげと感謝しております。

晩秋の

旅路に通ず

吟の道

嬢風

納吟を終えて

上原支部 関井 倫子

木枯し第一号が吹いてから、めっきり冬の訪れを感じさせる十一月二十八日午後六時半より、納吟の会が開かれました。前日より伊藤先生、若奥様、先輩の方々が腕をふるってのお料理作りや、諸事の準備に大奮闘でしたとの事で、食卓には心のこもった御馳走が色どりもきれいに並べられておりました。まず支部長さんの挨拶が始まり、根岸、加藤、沼田先生の順で、傾心会の発展と、吟友の方達の健康と心の和の大切さとの御挨拶を拝聴し乾盃、厳肅のうちにも和気藹々の雰囲気ではじめられました。各人独吟なさる方もあり、又連吟、合吟なさる方もありました。先生方は一生懸命耳を傾けて下さり、一吟終る毎に、適格で丁寧な、又解り易く批評して下さいました。次に先生方の吟を聞かせて頂き、当り前の事ながら、素晴らしい吟に現実を忘れ、夢の中にいる様な気持ちでした。常日頃お教室で伊藤先生の御熱心な御指導のお蔭で、いさゝか棒読みから脱する程度にはなりましたが、今後もっともっと勉強せねばと、一層身の引きしまる思いが致しました。根岸

先生の、広瀬武夫「正気の歌」は本当に気魄がこもっていられる吟でした。その折先生は「吟じ終り感動で涙が出る様でなければ、吟じ方に心がこもっていないのではなにかと思えます」と言われました。「吟道」とはとても私など奥深くまで辿り着ける道ではないし、並の努力では歩いて行く事すらおぼつかない道とは思いますが、吟のお仲間に入れて頂きました以上は、せめて先輩方に置いて行かれぬ様、又足手まといにならずに頑張って歩いてゆきたいと思えます。加藤先生も沼田先生も「吟ずる本文は勿論ですが、通釈もよく読んで、詩の意味を理解し、作者の心情になって吟ずる事ですね。その様にすれば必ず心が入って吟じられる筈ですよ」「口は必ず大きく開けて吟ずる事」と教えて下さいました。伊藤先生から毎回御指摘頂いている事ばかりで本当に恥ずかしい思いで聞かせて頂いておりました。

ちょっと脱線いたしましたが一通り吟が終り、いよいよ無礼講の時がきました。が私自身緊張の連続で、無礼講どころではなく、先生方、先輩方の余興に拍手するのと喰べる方の口が動くのが精一杯でした。吟をなさる方は民謡や歌謡曲を歌われてもお上手で感心するばかりでした。時にはゼスチャーが入ったり、踊りだしたりで、みんな抱腹絶倒の連続でした。

何時もは大先生として近寄り難い先生方も、和やかな楽しさの中にすっかり溶け込んでいられる様子に、私もやっと緊張の糸がほつれホッとしました。時間の経つのも忘れさせる程の盛会のうちに、加藤先生の「少し早いですが皆さん良いお年を迎えて下さい。そして来年は又初吟会の時元気で逢いましょう」とのお言葉を頂き、一同一層の精進をお約束して納吟を終り、各々家路に着かせて頂きました。

クイズ・菅原道真 正しいものに○をつけて下さい。

1. 菅原道真作「九月十日」は
イ 五言絶句 ロ 七言絶句 ハ 古詩
2. 道真に無関係な神社
イ 天満天神 ロ 北野神社 ハ 南海神社
3. 道真はいつ頃の人ですか
イ 845〜903 ロ 1115〜1173 ハ 1328〜1386
4. 道真は誰の讒言にあったのでしょう
イ 藤原業平 ロ 藤原時平 ハ 藤原鎌足
5. 梅花でないもの
イ 白梅 ロ 紅梅 ハ 黄梅
6. 東風吹かばの東風とは
イ 春風 ロ 夏風 ハ 秋風

(答は一月号に)

晩秋の古都を尋ねて

十一月二十八日、十九名の吟友が鎌倉散策に集い、資料片手に鎌倉駅裏口から目的地へ。駅からほんのわずか路地に足を入れると、もうそこは古都鎌倉にふさわしい物静かな佇い。赤、黄の紅葉の美しさに目をみはりつゝ、山茶花の花咲く垣根の道を通りぬければ、谷戸径のあちこちに小さな石塔が秋草に埋もれていて、更めて歴史の都鎌倉を感じさせる。三々五々眺め、語らいつ、秋の野趣を満喫、梅の頃、桜の頃、あじさいの頃又来たいものと一同胸ふくらませ、満足して帰路についた。

石渡 桂風

木の実降る 佐助稻荷の寄進旗

源氏山 紅葉に若き頼朝像

化粧坂 昔を今に落葉の香

十六の井 底冷えて闇深し

尼の寺 しんと冬陽の交彩

葉狩 明山

鎌倉の 秋みつけたり野の仏

なゝかまど 景清窟を仰ぎみて

梵鐘の 静もる庭の冬もみち

からまりて 美男かずらや寺の道

足許の もみじやわらか化粧坂

練吟メモ

○ 国交途絶すること幾星霜。

修交再開の秋將に到らんとす

隣人の眼温かに吾人を迎え

北京の空は晴れて秋気深し

(注)。は韻字

○ 一九七二年日中共同声明で、北京を訪問した時の、ご存知田中角栄元首相の漢詩である。この時のよみうり寸評子は(むろん「冬の扇」「夏の炉」で実用にはならない。それに、日本人の漢詩は、中国の専門家が見ればおかしいかもしれない)と評している。

○ 専門的なことは分らないが、この詩、まず、日本漢詩最低の条件である韻を踏んでいない。一句末の霜(そう)は平声下七陽であるのに、二句目(とう)が去声二十号と変り、四句の深(しん)がまた平声下十二侵で、これは韻を全く無視したものである。(韻は四声韻譜の部目による)

○ 四時

春水満四沢 夏雲多奇峰。

秋月揚明輝 冬嶺秀孤松。

1. 五言絶句は、二句目と四句目の末字が

韻字となる。例外(一句末押韻あり)

2. 韻字峰(ほう) 松(しょう) 上平一冬韻

九月十日

去年今夜待清涼 秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜余香

(説明)

1. 七言絶句は、一句目、二句目、四句目の末字が韻字となる。

2. 韻字涼(りょう) 腸(ちよう) 香(こう)は、下平七陽韻

3. 極くまれに、一句目が韻字でないものがある。踏み落としという。

○ 律詩の場合(概略)

1. 五律は、偶数句末ごとに押韻する。

2. 七律は、一句末と、各偶数末ごとに

3. 五律、七律とも、一句末に例外あり。

(入 会)

672 手塚モト 逗子市池子二一六―二五

(逗子A) 電〇四六八一七―一五三〇

(退 会)

222 金子陽山(桜山A) 622 榎田孝雄(大船B)

さごんかの花が初冬の陽をうけて咲いてます。去年の今頃は、くーもーりーガラスにーの歌声に明け暮れていましたのに、その歌声も遠く彼方に去って、又一年が暮れようとしています。皆様お元気で